

偽装貧困論

斎藤 正

序 説

ガルブレイスは「豊かな社会」(The Affluent Society)によりアメリカの経済社会が既に新しい資本主義、大消費時代を体験し、そこでは古い資本主義にもとづく既成観念ではとらえることのできない問題が生じ、その解決の正しい方向を示すことを意図した。すなわち古い資本主義に存する三つの弊害、いわゆる三つのI、I₁ security, Instability, Inequality が新しい形で解決されたのである。第一のIについては保障なき社会より生ずる古い形の貧困にかわり「依存効果」にもとづく新しい貧困を説き、古い貧困が「一般性」より「特殊性」としての意義を持つようになったというのである。第二のIについては、古い資本主義に伴なう景気変動より生ずる恐慌失業のかわりに、新しいインフレーションの危機をとき、第三のIについては、不平等に関する意識がうすれたが、社会的資本充足の不十分なることより「社会的アンバランス」の発生を警告したのである。

本稿では第一の貧困の問題のみを取扱う。政策的接近として貧困の原因よりの方法をと、古い貧困の現代社会における存在領域を再確認し、古い貧困は先進諸国、とくにアメリカにては緊急の政策課題であり、福祉国家の模範イギリスにおいてすら、「貧困の小さな数字は、いまやすべての問題を忘れてしまつてよいことを意味していると考えられてはならない」(タロスランド、「福祉国家の将来」第一巻邦訳七〇頁)状況であり、わが国における生活保護法をうける世帯約六二万、実人員実に一六七万、老令人口の被保護者二〇万を見るとき、経済成長、安定政策の影に「特殊性」として取り残され、「一般性」でないが故にこそ考慮すべき古い傷跡を見る。正にガブルレイスの唱える貧困は、豊かさの平均値に偽装されたものと考えられ筆者は『偽装貧困』(Disguised Poverty)なる用語を設定する。

しかしガブルレイスの「依存効果」は政策的に第二義的意義しか持ち得ぬとしても、これはデューゼンベリーのRの創出過程を説明したものとして、その点に積極的意義を求めてみた。更にその点より低所得階層の消費行為に一つのパターンを設定する試みを行なった。すなわち、産業構造分析の二元的方法と同じく、消費行為が平均的生活水準によってのみパターンが設定されるのは不充分なため、低所得階層の消費者行動が特殊なものであると考える故である。最近、カプロヴィツのNew York Cityの低所得階層の生活調査から示唆を得て一つのパターンを設定したのである。

更に貧困問題には一国の福祉政策のみならず、世界的視野より解決さるべき人類福祉の問題がある。マルチセ、ミューダールを先頭に主張される低開発国の貧困がそれである。マルチセによれば、ある貧困な国は貧困な状態でとどめておくような仕方で作し、反作用する傾向をもつ諸力の循環的な座標を意味する。そのような循

環的座標の特殊の事例は想像するにたたくない。たとえば貧乏人は十分な食物がないかもしれない。栄養不足であるために彼の健康は弱いかもしれない。肉体的に弱いために、彼の労働能力は低いかもしれない。それは彼が貧困であることを意味するし、またそれは彼が十分な食物がないことを意味するだろう。……ある国は貧困であるがゆえに貧困なのである……ということの中には景気上昇、経済成長の上昇的螺旋の概念のみにて説明し得ない下降的循環の伝統的觀念が真理として存することを指摘したのである。「豊かな社会」がこの悪循環を立ち切ったとする論理は上昇螺旋の論理に沿って平均的人間を取扱っているのみであって下方的螺旋の論理が忘れ去られているのではないか。アメリカが貧乏退治のため職業機会法を作ったのは正に下方性への反省であった証拠であろう。しかしながらある先進国における下方螺旋を断ち切ることが却って世界的立場より後進諸国の下方螺旋を加速度的に大きくすることの危険があるという、新らしい福祉国家政策の与えられた立場は検討すべき余地が残されているのである。

補注 「貧困」なる概念は相対的な意味で扱われている。フリートマンは「消費の経済理論」(邦訳七〇頁)にて、「實際所得が低いのを貧乏とみなし、實際所得が高いのを金持とみなせば貧乏人はますます貧乏になり金持はますます金持になるということになる」としている。マーシャルの「原理」においても「その所得が三十磅であるか百五十磅であるかは非常な差異である。もし百五十磅をもつてすればその家族は完全な生活の物理的条件を有することとなり、三十磅をもつては之を有せぬこととなる……」(訳書四二頁)「彼等の肉体的、心性的、徳性的不健全は一部分貧乏以外の原因からも来ているのであるが、貧乏はその重なる原因である」(訳書四三頁)とし生活しうる物質的条件の不十分なるものを貧乏と規定している。マーシャルの経済学研究の基本精神の一つが貧困迫及にあつたことは次の点より知られる。「食しき人々を減ほすはそ

の食しき（箴言第一〇章一五節）であつて食乏の研究はやがて人類大部分の墮落の原因の研究である」（訳書四三―四四頁）と考へていた。このことはいわゆる貧困の下降螺旋を表わしているもので、ミユルダールにより「すべて持てるものは考へられ、いよいよ豊ならん、されど持たぬものはその持てるものも奪わるべし」（マタイ伝二五章二九節、十三章十二節）の引用にも似ている。また、ミユルダールは、アメリカの俗語「金持はますますたまる」とか南部ポルトガルのある農民の言葉「ここになにかをもっているものなんでも手にはいるが、なにももっていないものはなにもえられない」と云うことを引用し貧困の特質を下降的悪循環とした点に貧困政策のとるべき態度が与えられる。（ミユルダール、「経済理論と低開発地域」一三頁）

第一章 貧困の意義

貧困を経済政策的に取り扱かう場合、貧困の原因より接近する方法がよい。この方法によれば経済的貧困を自然的原因、個人的原因、社会的原因に大別される。この類別は生江氏によれば自然貧、個人貧、社会貧と名づけているものにあたる。^(注)この分類は社会発展史における貧の性格を示している点で優れている。

(注) 生江孝之「社会事業綱要」、巖松堂、大正十二年

第一の自然貧とは天災地変の結果一時的もしくは継続的に貧困に陥いものを称していう。洪水、旱魃、暴風雨、飢饉、地震等、経済的未開発の時期には殆んど自然力に委ね、これに対する防禦の知識も乏しい場合、惨憺たる貧困状態に陥ることを免れないとき生ずるものである。従つてこの自然貧に関しては過去の史実として世界各国にその数は無数にある。この貧は文化の発達に伴ないまた人智が進み人力を以て自然を征服する範囲が広

くなるにつれ次第に消滅する性質のものである。わが国の明治迄の歴史は飢饉の歴史ともいわれ、救荒政策に関する数多くの史実をみるが、明治以降、とくに十三年六月の備荒儲蓄法、三三年の罹災救助基金法などが救貧政策の性格をもったものといえよう。前者につき、大蔵省の立案理由をみると次の如くである。^(注)

旧税法ヲ廢セシ以來政府ハ豊歳ト雖モ增收ノ事ナキヲ以テ凶歉賑恤ノ資ヲ得ルニ所ナシ若シ一旦非常ノ災害ニ遭遇シテ而テ人民ニ備荒ノ儲蓄アラズンハ其慘状実ニ言フヘカラサルモノアラントス是レ儲蓄方法ノ最モ今日ニ急務タル所以ナリ且ツ地租ノ法タルヤ歳ノ豊凶ヲ以テ其額ヲ増減セス故ニ人民ハ豊歳ノ余剩ヲ儲存シテ歉年ノ納租ニ充テサルヘカラスト雖モ動モスレハ之ヲ常歳ニ浪糜濫用シテ遂ニ歉年納租ノ有恕ヲ哀顧スルニ至ル者多シ是ニ於テカ政府ハ更ニ延納規則ヲ設テ其罹災セシ歳時ノ租額ヲ後年ニ連納セシムルノ法ヲ立テタリ今其利害ヲ熟察スレハ人民ヲシテ之ヲ罹災ノ後ニ連納セシメンヨリハ寧口之ヲ罹災ノ前ニ儲蓄セシムルニ如カス又延納ノ為ニ租ヲ負フノ土地アラシメンヨリハ寧口人民ヲシテ常年ニ非常ノ備ヲ為サシムルニ如カス又不慮ノ災害ニ罹ルノ窮民ハ独リ政府ノ之ヲ救助スヘキミナラス其隣里郷党モ亦相救ヒ相恤ムノ情誼アリ故ニ人民ハ平時ニ於テ之ヲ救済スルノ備ヘナクンハ有ルヘカラス是レ儲蓄法ノ各地ニ欠クヘカラサル所以ナリ

(注) 参事院蔵書郡区町村編制法沿革並理由「九九—一〇四頁

現在わが国の科学技術の進歩は明治の時期と比較すべくもないにも拘わらず、年年繰り返される風水害による被害跡をたたず、自然的災害の「突発的」なる特性が「一般的」なものとして考えられ、後進的國家の貧と考えられている自然貧が先進國へ近づきつつあるといわれるわが国には發生の可能性を有する事実を直視せねばならない。山津浪による家屋喪失への補償を考へるだけでこのことは十分であろう。

第二の個人貧は個人的關係より貧困に陥つたものをいう。これは自動的なるものと他動的なるものに分ける。前者は遊惰、浪費、特殊な疾病の結果生ずるもの。後者は身体、精神に他より傷害を加えられたるため貧困

に陥るもので、この種の貧困は社会の発達に伴ない、個人的責任より次第に社会的責任に変化して来たことは言う迄もない。マルサス、ペンサムの個人主義観より貧困をみると、貧乏そのものはすべて社会という観念より個人の努力、能力の足らざるがためとし、失業に対しても全く個人的責任に帰したのであるが、資本主義社会の発達と共に、現在の個人貧乏は階級貧乏の延長であるという考えに変わって来るのである。

かかる個人貧乏に対する救済については、外国では慈善事業より救貧法への長い歴史を見ることが出来、公共的救済事業が発達したのである。この間に現在いわゆる福祉国家の相互扶助の精神が培われていたのである。福祉国家の概念を具体的に考察するならば、基本的人間としての人間的自由、平等の精神にもとずき、同時代の共同社会の相互扶助的精神が必要とされ、社会的連帯の条件が政策にあらわれているか否かによって考察しうるのである。この精神を特に明治初期の若干の資料について見るとき、既に工場法などより、はるか以前に福祉政策の始めを知ることが出来る。資料一は参事院蔵書に基づく明治維新以来の町村沿革に関するもの、資料二は維新当時の豊岡藩文書による「条約」なるものである。「維新以来町村沿革」（十六年七月参事院）によれば、従来の相互扶助の単位は五人組によるものであり、特に名主、庄屋、年寄の制度にもとづいたのであるが、維新以来、旧制度を変更し、廃藩置県の後、郡町村を大小区に分ち、名主、庄屋年寄の旧称を廃し、区長、戸長とし、戸長の制も次第に変革を来たしたのである。五人組を変革することは相当の抵抗が予想されるのであるが、元年七月の京都府大政官の布告によれば事理をつくして新法の説得にあたっていることが伺われ、町組五人組仕法は現在の福祉制度にみられる諸法が既に含まれていることを知る。

補注A 「維新以来町村沿革」は明治元年より十六年に至る戸町及町村に関する沿革を編纂したもので次のものが記されている。

(1)京都市における町村に関する通達並に五人組仕方(元年七月)(2)京都府下郡市社寺農商制法並村町役心得(二年三月)このうちには郡中制法、市中制法、村庄屋心得条目、中年寄役可心得条々、町年寄共可心得条々、東京市中取締改正その他が含まれている。

○町組五人組仕法(共同福祉に関する項)

一、組合骸寡孤独廢疾ノ者ハ不及申火災盜難ニ罹リ又ハ産業ヲ失ヒ渡世難渋ニ立至リ候者有之時ハ速ニ可申出ハ勿論ニ候ヘトモ大年寄役ヲ始メ町役人トモ精々申合セ平常扶助ノ道ヲ可尽事但組内ノ者必至困窮ニ迫リ非命ノ死ヲ遂ケ或ハ乞食ニ零落シ又ハ悪心ヲ生シ盜賊ニ陥リ候モノ有之時ハ畢竟平常世活不行届ノ故ニテ其町内役方ノモノ越度タルヘキ事

一、善行奇特人有之時ハ組内ニ謂ニ不及他組タリトモ互ニ穿鑿シ早速申出ヘシ善人ノ出ルハ兼テ示方宣敷故ニテ其組内ノ美事タリ……

一、組内放蕩無頼ノ者有之時ハ其組町内役方ノ者其父兄並ニ親戚俱々厚ク説諭ヲ加ヘ善路ニ導クヘシ

一、組内諸願事訴訟又ハ難渋ノ筋申出候節ハ其組町内役方ノ者篤ト聞糺シ早速取次申出ヘシ……

一、五人組ハ一町内ニテモ親戚同様殊更懇切ニ相交リ吉凶相扶ケ疾病相憐ミ盜難火災其外非常等有之時ハ互ニ可相救事……

○京都府郡中制法中厚生に関する条項

一、五人組ノ儀ハ家並最寄ヲ以テ組合セ親戚同様親シク可相交事……(市中制法モ同ジ)

一、村内懇和シ吉凶相助ケ善ヲ勸メ悪ヲ戒メ共々渡世ノ安穩ヲハカルヘキ事(市中制法モ同ジ)附孤独廢疾無告ノ窮民ハ村内互ニ申合常々心ヲ付ケ救助申出等遺漏沈滞不可有之事

附火災盜難或ハ病氣等ニテ産業ヲ失フモノアラハ組合村内心遣ヒ産業ニ基カシムヘシ……

一、横死人自害人倒レモノ等有之ハ番人付置可遂注進事

一、往来ノモノ怪我病氣飢渴等ニテ相煩ハハ医師ヘ見セ能々介抱イタシ遣スヘシ……

偽裝貧困論

一、捨子墮胎制禁ナリ自然貧窮ニテ養育不能者ハ可申出救助シ可遣事

付捨子有之節ハ村内申合致養育置可届出事、

一、田畠不荒様ニスヘシ水損等ニテ荒地トナリ起シ返シ一家ノ力ニ不及処ハ村中互ニ助勢スヘシ村中ノ力ニモ不及程ノ「ハ可申出事、

以上は市中制法にも全く同様の条項がみられる。

○村庄屋可心得条々のうち厚生に關するもの、……

一、百姓離散セサルヨウ相心得貧窮ノモノアラハ難渋イマタ行詰サル内扶助ノ手立ヲナスヘシ……

一、水利ヲ起シ土地ヲ開キ良木ヲ植付物産ヲ盛ンニシ永世村里ノ榮ヲ計ルヘキ事

一、村内懇和善ヲ勸メ惡ヲ戒メ風儀ヲ宜ニ導事

○町役心得条目のうち

一、善ヲ勸メ惡ヲ戒メ風儀ヲ宜ニ導キ市中永世ノ繁榮ヲハカリ窮民救助凶年手当等無怠可遂心配事

○町年寄共可心得条々のうち

一、町内家々離散セサルヨウ相心得貧乏ノモノ有之ハ難渋行詰サル内扶助ノ手立ヲナスヘシ……

B 豊岡藩条約

一、凡ソ同シク約ヲ定メ誓ヲ結ヘルモノハ善キ行ヒ善キ業ヲ以テ互ニ勸メ励マスヘシ、善キ行ヒ善キ業トハ道理ニカナフ「ヲ見レハ必之ヲ己レノ身ニ行ヒ己レノ過失ヲ聞ケハ必速カニ之ヲ改メ身ノ不始末ヲナサス家不和ヲ興サス父兄ハ大切ニ事ヘ子弟ハ手厚ク數ヘ下男下女ハ不便ヲ加ヘ目上ノ人ハ之ヲ敬マヒ親類ハ之ヲ睦シクシ朋友ハ正シキ人ヲ擧ミ潔白ノ心ヲ守リ広ク人ヲ恵ミ人ノ付託ハタシカニ引キ受ケ人ノ難儀ハ心ヲ尽シテ之ヲ救ヒ人ノ過失ハ慙コロニ告ケ知ラセ人ノ相談ハ実意ヲ以テ話シ合ヒ人ノ事ニハ力ヲ尽シテ周旋シ喧嘩争論ニハ和平ヲ取り扱ヒ事ノ是非ハ明カニ之ヲ判断シ益アル「ハ之ヲ興コシサ

ワリ有ルコトハ之ヲ除キ御奉公ヲ大切ニシ學問ヲ勉メ武芸ヲ練リ禮儀ヲ習ヒ筆札等數ヲ學ヒ詩歌音楽ヲ玩ソフコトヲ言フ也

一、過失有ル寸ハ互ニ意見ヲ加ヘテ之ヲ規スヘシ過チニ義ヲ犯セル過チ有リ身ト修メサルノ過チ有リ義ヲ犯セル過チトハ第一酒ヲ縱ママニシテ乱妨ヲナシ將基雙陸賭ケノ勝負ヲナシ爭論ヲ好ンテ人ヲ罵詈訾打擲シ人ノ越度ヲ訴ヘテ罪ニ落シ入レントシ、入ラサルコトニ公事訴訟ヲ興コス事、第二禮儀ヲ壞フリ法度ヲ犯カシ其他ノ惡行ヲナス事第三妾ニ人ヲ輕蔑シ妾ニ人ヲ批判シ己レカ勢ヲ恃ンテ人ヲ蹈ミ付ケ過ヲ知リツツ改メス人ノ意見ヲ聞ヒテ愈惡事ヲ增長スル事第四人ノ為メニ事ヲ謀リ反テ人ヲ惡事ニ落シ入レ人ト約束シテ退ヒテ即チ之ニ背ムキテ衆人ヲ惑ハス事……

一、災難ノ事有ル寸互ニ救ヒ助クヘシ、災難ノ事トハ

第一洪水火災ノ事有レハ從ヒテ之ヲ救フヘシ

第二盜賊ニ侵サルルコト有レハ力ヲ合セテ之ヲ追ヒ捕ヘ或ハ官府ニ訴ヘ其家貪ケレハ其費ヘヲ助クヘシ

第三病氣ノ事有レハ往ヒテ之ヲ問ヒ疾重ケレハ医者ヲ尋子葉ヲ求メ其家貪シケレハ其費ヘヲ助クヘシ

第四死喪ノコト有リテ其家貪ケレハ金錢ヲ贈リ且之ヲ貸シ無人ナレハ諸事引受ケテ世話スヘシ

第五孤子ニテ身ヲヨセヘキ親類ナキ者有リテ生産ノ立ツヘキ者ナレハ之カ為ニ仕法ヲ立テ入費ノキマリヲ定タメ善キ師匠ヲ取ラセ婦或ハ夫ヲ撰シテ婚姻サセ生産ノ立タサル者ナシハ衆人力ヲ合セテ取リツツカセ退斷絶ニ及ハサラシメ若シ其幼年ヲ侮トリ之ヲ侵シ欺ク者アレハ之カ為ニ理非ヲ正シテ之ヲ弁シ若シ身持宜シカラサルコトアレハ心ヲ注ケテ之ヲ防セキ之ヲ戒シメ不義ニ陥ラサラシムヘシ

第六人ノ為ニ無事ノ罪ニ落サレ自言ヒ聞クコト能ハサル者アレハ或ハ官府ヘ訴ヘ或ハ方略ヲ以テ之ヲ救フヘシ

七貧窮ニ安シ分限ヲ守リテ生計如何ニモ立サル者アレハ衆人力ヲ合セテ之ヲ助ケ力足ラサシハ他人ニ乞ミテ金ヲ仮リ生計ヲ立サセ賦ヲ以テ返金セシムヘシ

C 参事院藏書「鄉村考」(明治十六年)は往古より徳川氏に至る鄉村及鄉村吏胥の沿革を記したもので補注A資料の前編

にあたるものであるが本稿では使用しなかった。

第三は社会的要因より生ずる貧困を社会貧として分類する。この種の貧困は個人貧を社会制度により生ずるものであるということに置きかえたもので、資本主義的貧困であり次第に公共団体による扶助制度が発達して来たのである。福祉国家なる新しい概念の発生するまでは、いわゆる社会事業、社会福祉事業の名の下で、社会政策の徹底と相まって資本主義諸国の中で貧困対策が試みられたのである。

補注 貧困を原因より分類した研究は数多くあるが、いまその重なるものを整理すれば次の如くである。

- 1、チャルズ・ブリス、犯罪、悪癖、飲酒、怠慢、窮民相互の交際、遺伝、精神薄弱、短慮、無能力、早婚、係累過多、奢侈、浮薄、独身、遺棄、疾病、良人の死亡、父母の死亡、不運、老衰、不時の災害、職業の失敗、職業の欠乏（生江、同上書七一頁）

- 2、ヘンダーソン、無能、遊惰、飲酒、浪費、早婚、賭博、濫救

3、ワナー内因（主観的）

- | | | | | |
|---------|--------------|--------|---------------|----------|
| 本人に属したる | 1、怠惰又は不充分の能力 | 2、放縱短慮 | 3、特殊の疾病 | 4、判断力の |
| 性 | 質 | 欠乏 | 5、不健全な性慾 | |
| 本人に属したる | 1、浪費 | 2、性慾乱用 | 3、飲酒不摂生の食物の摂取 | 4、家庭的關係の |
| 性 | 癖 | 無視 | | |

外因（客観的）

- | | | | |
|--|-----------------|------------|-------------|
| 1、天然資源の欠乏 | 2、天候の不良 | 3、衛生設備の不完全 | 4、交際又は境遇の劣悪 |
| 5、法律の不備 | 6、誤りたる又は不適當なる教育 | 7、濫救的慈善 | 8、不良なる産業状 |
| 態（イ、貨幣価格の変化、ロ、商業界の変動、ハ、悪税、ニ、不時の災害、ホ、労働者に対する抑圧、ヘ、労働需給の停滞、 | | | |

ここにおいて貧困者を救済するため、何が貧困であるかを量的に規定する問題が生じて来るのである。貧困と

は相対的な用語である。しかし社会通念として貧困が生活水準の低い現象を指しているため、そこにある比較基準あるいは貧困を測る何等かの尺度を想定しなければならぬのである。イギリスの救貧法以来貧困調査が数多く試みられたのである。たとえばブースの第一ロンドン調査（一八八六—八八年）、ラウントリーの第一ヨーク調査（一八九九年）、スミスの第二ロンドン調査（一九二八年）、ラウントリーの第二ヨーク調査（一九三六年）などがある。之等の貧困尺度は相対的なものであり、有名な想定はラウントリーのもので、第一義的貧困（Primary Poverty）として貧困家庭のうち、その家庭の総収入が単なる肉体的能率を保持するために必要な最小限度にも足りぬ場合を定め、単なる肉体的能率を保持するに足るだけの場合を第二義的貧困（Secondary Poverty）と名づけた。この分類は生存水準と生活水準の如く、あるいは絶対的と相対的など種々の用語で使用されている。^(註)

(注) かかる分類について若干のものを整理すると次の如きものがみられる。

(1) ブース H中流階級の上、G中流階級の下、F上級労働者、E規則的標準賃銀取得者、D規則的少額賃銀取得者、C一時賃銀取得者、B臨時賃銀取得者、A臨時労働者の最下層

(2) バキール 1生存水準以下の人、2能力の標準に達している人、3慰安の標準にある人（VAKIL, Poverty and Planning 1962, p. 7）

(3) 気賀健三

「現代の社会における貧困は第一に生活を維持するのに困難なほどの所得が得られぬひとびと或いは所得のまったくないひとびとを数える。つきにそれよりは幾分高く生活の肉体的な維持は可能であっても、実質的に極貧状態にあつて健康な生活を維持することの困難な階層……この意味の貧困階層はいわば絶対的な意味の貧困……このほか相対的貧困といわれるものがある。それは自他の生活の比較からして貧困の感じをもつことから

生ずる。」(「経済主体制講座」第一卷第八章 福祉国家、二九七―九九頁)

かかるいみより貧困は生活水準を基準としての相対的概念なることを知るのであるが、現在この問題については家族規模構成による差異が貧困規準の客観性を保たせるに大きな障害があることのため種々の検討が加えられている。

さて貧困に関する新らしいといわれる解釈が「豊かな社会」に示されたのである。ガルブレイスの貧困はアメリカ社会の大消費時代における貧困の一般的性質を「依存効果」なるものによって説明したのである。その特徴を単的に表わしている箇所は次の章句である。

「ある人が毎朝起きるたびに悪魔に襲われる。この悪魔はある時は絹のシャツを、ある時は台所用品を、ある時は装飾用の壺を、またある時はオレンジスカッシュをほしがる欲望を彼の心におこせると仮定すれば、その場合には、この欲望の焰を鎮めるための財貨を求める努力は、たとえそのものが、どんなにへんなものであったとしても、賞讃に値する。しかしもしその悪魔は、そもそも彼によって育てられたものであり、その結果としてこの欲望が生じたというのであれば、そしてまた、欲望を鎮めるための努力が悪魔を動かして、ますます大きな努力をしなければならぬというのであれば、彼の解決方法が合理的であるかどうか疑問である。」(「豊かな社会」邦訳一四〇頁)「全般的な生活水準が低い場合よりも高い場合の方が福祉はより大きい、という仮定はもはや妥当しない。どちらの場合でも同じなのかもしれない。高水準の生産は、欲望造出の水準が高く欲望充足の程度が高いというだけである。」(同上書一四四頁)

ガルブレイスの貧困解釈について注意すべきことは、「依存効果」による精神的窮乏が現代の病であると説い

たことにあるのではなく、古い貧困が「一般性」より「特殊性」に変位したということにある。古い貧困についてガルブレイスは原因より二つに分類している。その一は個人的貧困であり、この貧困は個人の性質によって発生するものであり、ある環境の下にある他の大部分の人々が自己の環境を克服し得ているのに、その個人または家族の特有な性質のために一般の福祉にあづかれないことから生ずるいわゆる個人的責任である。この場合、精神薄弱、不健康、極端な多産、不十分な教育をあげている。これは若干の問題がある。

第二の貧困をガルブレイスの用語では「島の貧困」と名づけているものであり、この種のものは、貧困の島として現われる。その島では、すべての人が貧しい場合で、この原因は、比較的多くの人が自分の生れた場所または近くで暮らしたいという欲望をもつことに関するとする。この例として都市の貧民窟などの如きものをあげ、環境の不利が悪循環を繰返し、いわゆる社会的貧困をあげている。ガルブレイスは「豊かな社会」二三章で古い貧困の問題を力説している点は注意せねばならない。すなわち、

「貧困は残っている。貧困を明確に定義することは出来ないけれども、ここでも知的な妨害者に反駁するための戦術として以外には明確な定義は必要でない。ある意味では貧困は物理的なことである。貧困な人は食物は限られて不十分に衣服は貧弱で住居は混雑し寒ききたない。その程度がひどいので、生活は苦しく寿命は短い。しかし生活水準に関する事柄においては、すべてが相対的だとするのあまりに安易だが、すべてを絶對的に考えるのも誤まりである。人の所得が生きてゆくには足りるものであっても社会的な所得水準よりはるかに低い場合に、その人は貧困なのである。……五〇年代の中頃のアメリカでは現金所得が千ドル以下の世帯が全所得の十三分の一であった。……近代の貧困の所在は都市の貧民窟よりもむしろ農村の貧民窟によって代表

されるのだ」(「豊かな社会」邦訳二九八頁)としている。

いまアメリカ経済社会を見ると、「依存効果」に依る貧困の一般性を認める段階にあるとは思われない。数多くの古い貧困が政策課題として解決を迫られている。ジョンソン大統領の年頭教書、ミルダールを如何なる学派のものと考えるにせよアメリカ貧民の実情をあげた「豊富への挑戦」、ニースウイクの論説はアメリカの古い貧困の実情を訴えて余ますところはない。新しい貧困こそ正に、偽装貧困の名の下に「特殊化」さるべきものでないだろうか。

補注(1) ジョンソン大統領「一般教書」一九六四・一・八、本政府はいまこの場でアメリカにおける貧困への無条件戦争を宣

言する。私は本議会と全アメリカ国民に対し、この努力において私に協力するよう要請する。これは短期間の、あるいは容易な闘争ではないであろう。どのような単独の手段も方策も十分ではあるまい。しかしわれわれはこの戦に勝つまでは休止しないであろう。……私が提案する計画は、所得が少なくても基本的な必要さえ満たさないアメリカの全家族の五分の一を援助するため、この協力的な方法を強調するつもりである。より正確な攻撃のための、われわれの主要な武器は、よりよい学校、よりよい健康、よりよい家庭、よりよい訓練とよりよい就転の機会であり、これでより多くのアメリカ人——とくに青年——がむき苦しい生活と悲惨から逃れることを助けるのである。」

(2) ミルダール「豊富への挑戦」一九六三年、四六―七頁、もし貧困を多人数家族で年収千ドル以下独身者で二千ドル以下で生活せねばならぬことと定義すれば、一九六〇年に、三八〇〇万すなわち、全国民の五分の一以上が貧困であった。自由―貧困よりは上だが、現在のアメリカで控え目ながら快適と考えられている生活水準に必要なものを充たすには足りない。すなわち多人数家族で四千ないし六千ドル、独身者で二千ないし三千ドル——の境遇にあったのは三九〇

○万人これも全國民の五分の一以上であつた。全くの窮乏——貧困線を代表する所得の半分以下の所得しかない人々の状態とされる——という運命におちいつていたアメリカ人は一二五〇万以上、つまり、合衆国人口のほとんど七％であつた。不自由、貧困、窮乏というこれらの種種な部類に属する人びとの割合は、大不況時代以来最初は速かに、のちに緩慢に減少してきた。緩慢化は最近の半分以下の所得しかない窮乏層の割合は、じつさいわずかながらふえさへした。全國民のあいだの所得分布も次第に平等化するという傾向をたどってきたが最近の一〇年間にいたつて經濟の相對的な停滞の反影として國民のあいだの經濟的不平等が強まる新傾向がでてきた。

- (3) ニューズ・ウィーク一九六四年二月、「結局貧困のどこが新しいのか？ 聖書に「貧者は常になんじととも在り」という言葉がある……いままでのところ、アメリカにおいてさえ、全くそのとおりだったのだ。しかし、今世紀半ばのアメリカでは貧困は特別のきびしさと挫折を伴う、歴史上始めて一社会が貧困を一掃する技術的な諸資源を獲得したのに皮肉にも、まさにその技術が貪しい者の苦境を悪化しつつあるのだ……今日アメリカで貧困であることは國民の仲間から足を踏み外すことであり樂園における異邦人であることなのだ」。

第二章 低所得階層の消費行動

低所得階層の消費行動が如何なるものであるかに関して古来、ラウントリー、ブース等の調査が著名であるが、一般的には限界消費性向が高所得階層に比して非常に高いことなどしか知られていないようである。一般にモデル設計を試みる際には、平均的消費者の態度を対象に考えられたものであるが、少なくとも、この平均を形成するものは消費者の場合、全世帯人員の約六割より七割程度の平均線以下のものが存することは特に政策判断を行なう場合注意せねばならない点である。このことは産業構造分析を試みる場合、大企業と中小企業

がそれぞれ特殊な存在領域を有しており、平均的水準の上昇、下降が両部門に別々の影響を与えていることを了解していることと全く同じ意味を持っている。かくて、わが国においてもいわゆる偽裝貧困の時代、あるいは伊東氏によれば擬似大消費時代といわれる如く耐久消費財の生活必需品が急激に進んでいる場合、消費者のうち低所得層が如何なる態度で生活しているか、この点について一つの低所得層の消費パターンを考案せんとするのが本章の目的である。

この場合、予備的知識として次の三つの点を問題とする。一は財の緊急度、二はカプロヴィッツの最近のニューヨークシティの貧民階層の消費調査、三はデューゼンベリーのRについてである。

(1)財の緊急度については消費態度は経済成長に伴いな次第に財の必需品としての内容を変更し、その程度を測定する必要が生じて来る。最近迄は生活必需品といえば常識的に生存水準を維持するに足るものをもって代用していたようである。この財の生活緊急度の測定に関してはアレン・ボーレーの方法があるが、普通家計調査の支出階層別によってクロスセクション分析で試みられているが、この方法では現実の世帯の消費態度は近似的にかつかまえられない。従がつてむしろ経験的に求められる生活態度より判断する方法を利用した。この点につき参考となつたのは伊東光晴氏「大消費量時代」一〇六頁の一節で、「必要と欲望とが乖離してゆくという豊かな社会の法則を量的に測るならば、需要量の増加が社会が豊かになるにつれ財の種類によって相違してくるといふ形であらわれてくる」ということである。この点を経済企画庁編「三八年下期、消費と貯蓄の動向」を使用し、耐久消費財購入所持世帯の割合より推論した。この場合の仮設として、三三年九月と三八年八月の各財の普及率の増加割合をもつて必需品緊急度曲線を描き出した。この際、伊東氏によれば、消費革命中の財がピークを示す

必需品と贅沢品の区別が購入動機から判断されるのではないかと考えられる。すなわちわが国の場合は自動車はなお誇示効用の範囲から抜けていないとも考がえられよう。

以上の分析と別に低所得層消費動向の問題は生産者に依る依存効果の一形態としての信用賦払制の拡大が考がえられる。低所得層にはガルブレイスの云う広告宣伝による「依存効果」はアメリカの実証によれば余りみられないが、わが国の場合についてははっきりしない。ただ言えることは、自動車販売などが Door to Door 方式に変化しつつあることである。

(2)次にカプロヴィツの貧困階層消費調査についてモデル作成の予備知識を求めてみる。カプロヴィツ (D. Caplovitz, *The Poor pay more*, 1963, Free Press of Glencoe, pp. 220) の行なった調査対象は次の構成をなしている。

サンプル数四六四世帯

種族、白人二五%、ネグロ二九%、プエルトリコ四六%

所得、二千弗以下一〇%、三千弗以下二七%、四千弗以下三〇%、五千弗以下二二%、五千弗及以上一二%

年令、二〇—二九才二〇%、三〇—三九才三四%、四〇—四九才二四%、五〇—五九才二%、六〇才及以上一二%

教育程度、初等四九%、高校中退三四%、高卒一三%、高卒以上四%

家族規模、一—二人一三%、三人一九%、四人二八%、五人一八%、六—七人一五%、八人以上七%

家族構成、夫婦のみ七%、父母子供七一%、母、子供一九%、女子一%、その他二%

所得源、稼得のみ七二%、福祉救済一五%、年金一三%

出生地、ニューヨークシティ一七%、南部二二%、その他のアメリカカ地区六%、プエルトリコキニートバ四三%、歐洲その

調査地区、New York City. ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ 1. East Harlem 2. La Guardia 3. Vladeck

この地区のうち 2、3、は Lower East Side にあたり、7、8、9、は East Harlem の Third Avenue および一二五番街に約六十軒の家庭器具販売店があり、住民の多くが救済をうけながらも高額層と同じく高価な耐久消費財を使用して生活しているという状況に消費者行動の一つの型を見ることが出来る。

一般に低所得層が職業的に社会の底辺で生活する場合考えられることは、この低い社会的水準を改善する望みを消費によって満足せんとするしか方法は考えられない。カプロヴィツはこれを「補償的消費」という概念によって整理しているが、丁度ヴェブレンのいう高額所得者が社会的優越を標示するため極立った消費を行なうのと対照的であり、職業的に社会の中で自己の地位を改善する機会も少ないため、生活の希望を消費に転嫁してしまふことになるわけである。リンドのいうところによると「労働者は上昇する生活水準に魅せられて、都会の他のひとびとから自からを離れまいとする。彼等はミドルタウンの求める自動車のごときものを欲しがらる。自動車の所有者は『アメリカの夢』という大きな画面で労働者に立ち向い、また自尊心にむすびつくように自動車にたがっている。……労働者が何故労働組合をつくりたがらないからを知ることが容易なことだ。彼等は自動車をもち、一ガロンのガソリンを借りうる限り乗り廻して組合などに注意を向けない」^(注)

(注) Caplowitz, op. cit. p. 13.

ここに引用したことの中には低所得階層が社会的水準に達する欲求を満たすに必要な手段を持たないで上層の生活を求むるよう社会によって仕向けられている消費者のジレンマの姿を見ることが出来る、リンドの論文が一丸

三七年に既に発表せられていたことからみても、デューゼンベリーの「デモンストレーション、エフェクト」は新らしいものではない。

カプロヴィツは詳細な調査に依り低所得層の耐久消費財の購入パターンにつき、ガルブレイスの依存効果に似た信用制度のごまかしに依ってつねに当該所得水準以上の生活指向を強いられているアメリカの実状を報告している。調査対象となった低所得層は耐久財を買う手持現金もなく、南部よりの移住者は十分な信用もなく、一般の商慣習に従う社会の中で如何に振舞うかについても馴れていないおよそ都市文化と似つかわしくない伝統的社会より移住し、新聞の販売欄、広告など店の優劣を知らない場合が多い。ここに商人のつけこむすぎがあり、低所得者は常に高い品物を買わされているといふのである。^(注)

(注) 消費者行動の実体についての分析は更にカトナ (Catona) の研究に依らねばならない。

(3) デューゼンベリーの R について考える。

デューゼンベリーは個々人の消費支出は自己の所得の函数であるのみならず、社会的に接触する人びとの消費水準の加重平均値の函数であるという考え方に立ち各人の消費選択は独立でなく、各人の消費は相互依存関係 (Interdependent Solidary) にあると考がえたのである。このような考がえ方は既に社会学的分析としてベブレンの「有閑階級論」(The Theory of the Leisure Class, an Economic Study of Institution, 邦訳大野信三、大正十三年而立社) が行ない、わが国にては高田保馬博士がベブレンの立場に立ち消費行動の効用的理論づけより貧乏の本質を解明し、デューゼンベリーが積極的な優位は消費函数としてモデル化した点にのみある。

ガルブレイスはデューゼンベリーの消費理論につき次のように説明を加える。すなわちケインズによれば人類

の必要は二つの種類があり、他人がどうであろうと、自分はそれが欲しいという絶対的な必要とそれを満足させれば他人よりも偉くなった気がするという意味での相対的な必要であり、ケインズのこの二つの欲求の考がえ方がデューゼンベリーに通じていたという。「われわれの社会においては、社会の目標の一つは生活水準の向上である。それ自体が一つの生きものみたいなものである。その欲望は一そう大きな支出をしたいという衝動にかり立てられる。しかもその衝動はその支出によって満足される筈の必要自体から生ずる衝動よりも強いこともあるのだ」(デューゼンベリー、「所得・貯蓄・消費者行為の理論」三九頁)ということであるが、この考がえのもとにデューゼベリーは次の推論を試みたのである。われわれの消費財の効用指標は消費の絶対的な高さによって定まらず、自己の消費は他の人びとすなわち社会的消費Rに対する比率によってきまる。いわば消費の効用は相対的消費によって定まるとする。そのRは次の如き性質のものとした。

いま消費主体を123…… i j とすれば $C_1 C_2 C_3 \dots C_i C_j$ は各人の消費、 $\alpha_1 \alpha_2 \alpha_3 \dots \alpha_i \alpha_j$ を各人に接触する頻度とすれば、 α_{ij} は i 番目の消費者が j 番目の消費の上に作用するウェイトである。 R_i をそれらの加重平均とすれば、 $R_i = \sum \alpha_{ij} C_j$ となる。したがって、ある個人の効用指標を U_i とすれば、 U_i は相対的消費 C_i/R_i の函数とすることになる。すなわち $U_i = a_i [C_i/R_i]$ 、個人の効用は C_i のみならず、資産 A_i 、 n 期までの所得 Y_{in} などが影響するが、これを切はなして考がえらるゝ

$$C_i/R_i = a + b (Y_i/R_i)$$

$$C_i/Y_i = b + a/(Y_i/R_i)$$

で、 R_i を一定として、 Y_i が上昇すれば、 C_i/Y_i は低下するが、個人の絶対所得が上っても R_i と同程度に上るなら

Y_i/R_i は変化なきため、 C_i/Y_i は一定であることを意味する。このモデルにはその後種々の批判、改変が試みられていたが、高田博士によれば、「 R の最大なる困難は社会における生活標準の圧力乃至的拘束力を説明し得ざる点にある。生活標準というものには個人がせてそこまで生活を上げようとする意欲が意味せらるるばかりでない。それは社会的規範であり信条である。人間としてそこまで生活せねばならぬという拘束が感ぜられる。貧乏に伴う一種の羞恥の感情は主としてそこから来る。達すべしと期待せらるるところに達し得ざることに伴う非力感、即ち、劣者感情とある種の義務を果し得ぬという苦悩とがそこに盛られている。それは生活水準という客観的なるものの認識のみから由来するであろう。^(注)

(注) 高田保馬「消費函数の研究」五二頁

デューゼンベリーの R は各人が隣人の消費に刺激されて互にその消費水準を均衡せしむる方向に行動するいわゆる既存の水準が一般化される働らきを明らかにしたのである。しかし、この隣人、世間一般の消費水準、従つて高価なる消費財需要が上昇する過程を明らかにしてないのである。この消費財需要の上昇動機を説明したのがとりもなおさず、ガルブレイスの「依存効果」であろう。というのは R の上昇をあらかじめ明らかにしないで一般消費量 C への作用を説くのみでは生活水準の一般的上昇を説き得ないからである。

かかる点を心理学的に説明したものにヴェブレンがある。ヴェブレンは物財に対する欲望の増進は人間社会的要求の側から来る。誇示のために消費され、それへの擬態の過程を経て普及する。高田博士も貧乏の本質をこの誇示効用に求める。すなわち、「生活標準の規範性を考察しうる。……標準的消費者の生活水準は社会の多放者ということはお出来ぬ。特種の集団内部について考へても同様である。上級の生活者は少い。けれどもその近くの

地位のものは皆其生活に接近しようとする。個々人だけの競争関係のみを見れば互に敵対状態に立つ。けれども生活の向上を求めるのを社会生活の針路として肯定する意欲に於ては相一致して居り、自他ともにそこに進むことを連帶的に意欲している点に於ては、相互肯定の立場即ち友愛に立つ。それ故にAの生活水準の近くのものにとりては、Aに進むべしという要求が共通的であり、……それに接近し得ざるB水準の人人にとりては、到達を希求している目標に達せぬから、互に上り得ぬものとしての引け目を感じ、上昇への拘束力乃至無言の圧迫を感じる。それが収支均衡点の生活水準に於ては、資力さへあれば何とかしてそこまでは到達したい、又互に到達しようではないかという要求が広き範囲から認められている。……社会がせめてそこまで到達せよという期待があるのに、それに副ひ得ぬことに対する拘束即ち規範への背反と、個人の敗北感がこんがらかって低生活故の羞恥を感じる。生活水準が下位にあればあるほど、社会が規範からの脱落を責むる無言の叱責と、敗北の深刻の故に苦痛乃至耻辱感が強い。これが貧乏の正体である。」^(注)

(注) 高田保馬、「消費函数の研究」一二六―二七頁

さて以上の三つの予備的知識より低所得者の消費モデルを設定してみると次の如きものとなる。

$$C_L = aY_L + b(Y_I/R_N) + c(Y_I/G)$$

C_L は低所得者消費、 Y_L は低所得者所得、 Y_I/R_N は消費革命に向いつつある緊急度係数に対応する必需品係数、 Y_L/G のGはガルブレイスの依存効果係数と考える。

デューゼンベリーにあっては Y_L が無視されているが Y_L すなわち、所得の絶対額は消費規制の最大要因である。

具体的に欲求は潜在的にあるにしても顕在的欲求としてあらわれ得ない水準が存する。たとえば吾が国の自家住

宅所有欲求などは Y_L の大きさによって規制されるが如きものである。 Y_L/R_V の R_V はデューゼンベリーの R_i に類似したものであるが、 R_i は社会的消費水準とされているが、之を一步進んで考がえて見ると、消費革命にある財が現在耐久消費財を中心に行なわれ、先に分析した如く生活必需品としての耐久財は次第に変化しつつあり、T・Vセットの如きものは既に現代の文化的消費水準の基準から欠くことの出来ない財となつていることを考がえるとき、消費革命の波にある財より左側の品目は低所得階層でも当然持つべきであるという社会規範となつて来る。この刺激が低所得階層の生活を規制するのである。

更に Y_L/G は新しい生活水準創出行為を行なうデイラーの態度が之にあたるものであり、アメリカの Door to Door 方式の販売あるいは生産者の態度は比較的商品知識にうとい消費者の購買刺激を生ぜしめることとなる。信用賦払制の普及が擬似的所得をつくり上げアメリカの場合、低所得者へ低教育をそのままうけとるとき G は C_L に作用するものと考がえることが許されよう。